

聖書は、イエスが「わが神、わが神、なぜ、私をお見捨てになったのですか」と叫んで亡くなられたことを伝えています。まさに、私たちが生きる人間社会の現実、その場にいたら、思わず目を逸らしたくなるような、立ちすくんでしまうような、「神は私を見捨てたのか」と叫んでしまいたくなるような悲惨さを抱えています。世に希望を持つことが出来ているとすれば、それは、その悲惨な現実をまだその目で見ることがない、あるいは見ないようにしているからだけなのかもしれません。聖書は、全く正しい人であったイエスが、愛する弟子に裏切られ、人々から侮辱され、痛み叫ばれて処刑されていったというあまりにも不条理な世の現実をありのままに伝えることで、読者に安易な希望を持たせません。

聖書箇所には、イエスの墓が空であることを目撃したマリアと2人の弟子達の様子が記されていました。その時間帯が「まだ暗いうち」（1節）であったとされているのは、十字架の出来事を通して露わになった世の闇や不条理な現実が、未だ3人の心を支配していたことを言い表しています。ですがそれは、「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を…理解していなかった」（9節）からであるとされているところに希望を見出します。マルティン・ルターは、「我々にとって良いものは隠されており、また、深遠なものであるからこそ、逆の相の下に隠されている。例えば、われわれの生は死の下に隠され…誉は恥の下に、救いは滅びの下に、支配は追放の下に、天は陰府の下に、知恵は愚かさの下に、義は罪の下に、力は弱さの下に隠されている。だからこそ、神に対する信仰が場所を得るのである。」と語っています。だとすれば、人間にはとても理解の及ばない世界です。しかし、だからこそ希望があるのです。本当に確かな希望は、私たちの理解を超えたところになければなりません。私たち人間の側で思い描いている希望は、非情にも、不条理な現実の中でいとも簡単に崩れ去っていくからです。「死」という抗えない現実を覆したイエスの復活の出来事は、マリアと弟子たちの理解を超えていました。しかし、そこにこそ希望が希望たる所以があることを聖書は指し示すのです。

「わたしのうちは暗い。しかし、あなたのみもとは光があります。…わたしにはあなたの道が理解できません。しかし、あなたは、わたしの道をご存じです」。ナチスドイツ政権下、明日死ぬかも分からぬ獄中の中でボンヘッファーが書き残した祈りです。

（文責：望月達朗牧師）

